校長 荒木規夫から保護者・生徒皆様へのメッセージ【不定期コラム№13】R3 10/4

「家族のこと②」

【母のこと】

母は鹿児島の祁答院町（けどういんちょう）薗牟田（いむた）出身です。プロツアーのスタートコースとして平成３年開業の祁答院ゴルフクラブができるまで、市内からも遠く、隣家まで数kmもある、のどかな田舎でした。

母は自分の父親（私の祖父）の顔（元西武の工藤公康そっくりだったそうです）を写真でしか知らずに育ちます。母が生まれてすぐ太平洋戦争で南洋の島に出兵し亡くなったのです。祖母は満州からの帰還兵（私の血のつながらない祖父）と再婚します。母は２人の妹と１人の弟の面倒を見、農家の手伝いもしながら、この地で過ごします。当時の同級生たちの多くは、「金の卵」といわれ中学卒業などで、大阪などの都会へ集団就職していったそうです（後に私が教員になって貝塚二中に赴任した時、校区にユニチカという紡績会社がありました。その社宅に住む方と話をした折、この当時、鹿児島から貝塚へ、母と同じ年代の方がたくさん集団就職してきていたと教えてくれました）。

祖母は、自分が中卒で資格もないため、お金を稼ぐ手段が少ないと感じていたそうで、娘３人には「手に職」をつけさせようと、懸命にがんばったそうです。結果、長女（母）は短大を卒業し教員の、次女と三女は看護学校を卒業し看護師の資格をとることになります。

母は、「この時代は、単純だった」と言います。「私みたいな田舎の女性は、『良いところ』（“お金持ち”か“安定した仕事をしている人”）へ嫁ぐことが最優先。ほとんどの就職は結婚までの一時のこと。安定した仕事をしたいなら、運良くつてがあれば『役場の事務』、努力でなれるのは『看護婦（当時）』『先生（教員）』くらいだったよ」

選択肢が多いことは幸せです。しかし若さゆえ無限の可能性がある（ように大人からは見える）今の子達が幸せと感じているかどうかは、別問題です。まさに今、進路選択する中学生は皆深く悩んでいます。

まず「なりたい自分」が見つからない。世間には「夢を持て！」というメッセージが溢れています。しかし、何を自分の夢にすればよいのか多くの子にはわかりません。他のことには大概「正解」があるのに、夢にはありません。というか、正解だったかどうかを感じるのは、随分後のことなので、現時点では正解を出しようがないわけです。正解かどうかわからないことの選択は、ためらうのが当然です。

最近の学校では、子どものこんな課題を解決するために「正解のない問いに自分なりに応える」「対立する意見を調整し納得解を導く」といった経験をするカリキュラムが提案されています。しかし、最も大切なのは「一緒に悩んでくれる存在」です。もちろん教職員は一緒に悩みますが、生徒同士が一緒に悩み、思いを出し合える仲間となるよう取り組んでいます。保護者の皆様にも、子どもに「最後まで一緒に悩むよ」という想いを、伝え続けていただくようお願いします。

母の話に戻ります。母は短大を出て、小学校の教員として鹿児島で働き始めます。しばらくして、親戚筋からお見合い話がきます。相手は「堺の人で、京都大学出のエリート。裕福だ」という触れ込みだったそうです。「堺の人」以外は全くのデタラメ（不定期コラム№12 参照）なのですが、そんなことは母にはわかりません。

母は全く乗り気ではありませんでしたが、「良い話じゃないか」と周りが強引に進めていき、堺でお見合いをしました。した後で「お見合いをしたら必ず結婚をしなくてはならないものだ」と説得され、信じるしかなく、２年で小学校を退職し、泣く泣く結婚したそうです。

堺に来ても教員を続けられるという話でしたが、空手形。専業主婦としての毎日が始まります。“地方からきた嫁”と“都会の姑”のやりとりは、今は笑い話でも当時は厳しく、神経性胃炎で入院したこともあるそうです。何とか逃げ出そうと考え、実際に１度鹿児島に帰ってしまったこともあるのです。その時の父の「戻ってきてくれ」手紙を、今でも母は「いざという時のため」に、家にしまってあるそうです（笑）。

鹿児島に帰りたいと考えていた時、母は妊娠したくなかったと言います。「でも、初めてできた子を流産しちゃってね」つらい経験をした母は、次の妊娠を知った時、この地で生きていくことを決断します。

そうして生まれたのが、私でした。

【不定期コラム№14】へつづく

第三中学校ホームページ では、子どもたちの様子やお知らせなど情報発信しています。ぜひご覧ください。これまでの不定期コラムも「校長室より」のコーナーでご覧いただけます。

http://www.kaizuka.ed.jp/dai3-jh/

貝塚第三中学校ＨＰ